

慰靈のモニュメントと「銃後」社会 石川県における忠靈塔建設運動

本康宏史

Memorial Monuments to the War Dead and the "Home Front" Society: The Movement to Build Monuments to the Loyal War Dead in Ishikawa Prefecture

① 慰靈のモニュメント

② 「明治紀念標」と招魂祭維持講

③ 石川県の忠靈塔建設運動 おひめにかえり

[論文要旨]

近年、戦争記念碑に関して、近代社会を特徴づける「モニュメントリズム」を表象する「非文献資料」ととらえる研究がすすみ、その学問的意義がしだいに理解されるようになってきた。その際、戦争記念碑は「『癒し』の行為を表す象徴であった」だけではなく、「戦争の歴史化と再歴史化にも重要な役割を果たしてきたものである」という指摘がある。つまり、戦争というものがいかに記憶されるべきか、戦争では誰が記憶されるべきなのか、という問題をめぐって、戦争記念碑はまさに論争の的になつてゐたのである。

本稿では、こうした観点から、まず、石川県における戦争記念碑（戦前期）の全像を概観。さらに、金沢兼六園の西南戦争戦没者慰靈碑＝日本武尊像の建設事情、並びにこれを支えた地域社会の特色について考察を試みた。

いた招魂祭が、城下中心部の「兼六公園」、とりわけこの「明治紀念之標」（日本武尊像）前において開催されている点にも注目した。以後、金沢の招魂祭は、兼六園周辺で祝祭的に開催されることが常となり、日清戦争前後からは、「招魂祭維持講」をも組織するに至る。

一方、慰靈碑——慰靈標——慰靈塔の系譜を意識しつつ、昭和十年代に展開した「忠靈塔」建設運動について、「銃後」社会の形成過程を背景に、その運動の性格、さらには石川県下での実態を（他県との比較を交え）紹介している。